

《subjectivism》からの超越の道は、自ら開かれるであろう。なぜならば、われわれの「全存在」は孤立して存在するものではありえず、まさに存在的に存在に向けて開かれて在るものだからである（このことは勿論、精密な論証を必要とする。）したがって、存在に対して開かれて存在することの経験、すなわち超越の経験は、まさにわれわれの「全存在」の経験のうちに含まれているのである。このような「全存在」の経験を分析し、その自覚の過程を追求してゆくことは、「来るべき哲学」の主要なる課題となるであろう。そしてこの課題の達成のために、トマスの著作、特に『真理論』は無限に豊かな内容をわれわれに開示するであろう。

提題

トマス倫理学の現代的意義

稲垣良典

(1) ここで「トマス倫理学の現代的意義」という言葉は、現代における倫理的探究にたいするトマス倫理学の影響あるいは寄与、という意味に解する。

この場合、まず頭にうかぶのはトマスの自然法論（そこにふくまれている人間存在の歴史性への顧慮、経験的な探求の重視、などに注意）であるが、それは比較的良好に知られていることなので、立入って論ずることはひかえる。むしろ以下においては、トマス倫理学が現代において持つべき意義、つまり、それを現実化することがトマス研究者にとっての課題であるような「現代的意義」に目をむけたい。それはトマス倫理学におけるメタ倫理学、あるいは「道徳の形而上学」の側面の研究である。

(2) 現代のメタ倫理学の中心問題は、善（もしくは正）と呼ばれる倫理的価値を客観的に基礎づけることが可能か、可能であるとすればいかにしてか、というものである。この問題をめぐって、自然主義倫理学と分析的倫理学とが鋭く対立しているが、その対立は極めて限定された場面におけるものであって、トマス倫理学は上の問題の探究がより広い場面で行われうるものであり、また行うべきものであることを示すことによって、この対立を止揚しうるのではないか、というのが本稿の論

旨である。

すなわち、上の対立は、倫理的価値の基礎づけは自然的・事実に欲望、関心、必要などの観点から行うほかない、との前提に立った上で、この前提を受け入れるか、あるいは斥けるか、することによって生じたものである。だが問題は、倫理的価値の基礎づけはそれ以外の仕方ではなされえないのか、ということであり、トマス倫理学への反省はまさしくこの問題に関して新しい展望を開くものであるように思われる。

(3) 以下において、主として『神学大全』第二部の1, 1-5問題によりながら、トマスによる倫理的価値の基礎づけの試みを検討しよう。トマスにおいては、追求すべき・為すべき善たる倫理的な善は、人間が自然本性的・必然的に密着するところの究極目的ないし至福としての善に基づくものとされているが、問題は究極目的—至福がトマスにおいてどのように客観的に確立されているかである。より厳密にいうと、究極目的・至福が人間にとって「自然本性によって規定されている」とか、人間は「自然本性的にそれを欲求する」あるいは、それへの「自然本性的な欲望・傾向性を有する」などと言われる場合の、「自然本性」「自然本性的欲望・傾向性」の意味が問題である。それはたとえばカントのいう傾向性や欲求と同じものを指しているのか？ その意味で自然の因果性に服するものなのか？

トマスは「人間は至福たることを意志しないことは不可能である」(5・4)と言っており、あたかも、至福がその限りない魅惑でもって人間の意志を圧倒的にひきよせる、と考えているかのようである。「必然的」とか「自然本性的」というのは、なんらかの好ましいもの、魅惑的なものが人間の感覚的な欲望を動かすのと同じ仕方で、至福が意志を抗い難い仕方でひきよせるということ、その意味で意志運動の原因である、ということであろうか。トマスのいう自然本性的傾向性は一見したところ、そのようなものであるように思われる。そして、もしそうであるとしたら、カントのいう傾向性や欲求と同じものであることになる。

だが、ちょっと反省しただけで、そうではないことは明らかである。なぜなら、もしそうであったら意志はもはや自己原因あるいは自己動者——もちろん自らの運動の第一の原因ではないとしても——ではないことになるが、それはまさしく意志が意志ではないことを意味するからである。意志の自然本性的・必然的な欲求—

—「意志的」欲求ではなく——というかぎり、たしかに意志が自らよりもより高次の原因によって動かされていることが含意されている。しかし、それは意志の自己原因性・自己運動性を排除するものであってはならないのであって、むしろそれは意志の自己原因性を根拠づけるところの高次の原因でなければならないであろう。それは意志がまさしく意志たることを成立させ、根拠づけるところの原因であるといえよう。

ついでにいうと、この高次の原因を否定して、意志が自らに固有の原因性を最高のものたらしめようとする——あたかも自己が第一原因であるかのように行為すること——が悪にはかならない。それは意志に固有の原因性の最高の行使であるように見えて、実は意志の原因性の否定であり、いいかえると、意志はそこでは意志として行為すると同時に、自らが意志たることを否定している。しかし、この点にはこれ以上立ち入らない。むしろ上の簡単な考察によって、トマスのいう意志の自然本性的欲求・傾向性なるものが、カントにおける傾向性とは異なった概念であることが示唆されたとして、それをさらにトマスの至福論に基づいて解明してゆこう。

(4) 人間の究極目的が自然本性によって規定されている、とか、究極目的への自然本性的欲求がある、などと言われる場合の「自然本性」がいかにして認識されるかが問題である。それはたしかにすべての意志運動のうちに経験されているのであるが、あれこれの特定の対象へ向う意志運動において直接的かつ明白に認識されるのではない。たしかにすべての人間の意志運動は「至福たらんがため」に営まれており、そこに至福への自然本性的な秩序づけ、ダイナミズムを経験できるとしても、すべての人間の意志運動が真の至福へと導くものではない限りにおいて——トマスはこのことを反復指摘しており、至福論の結びともしている——そこに至福をめざす意志運動の根源たるところの自然本性を、直接に、そして全き仕方て認識することは不可能なのである。

特定の目的へと向う意志運動において、その根源としての自然本性的欲求あるいは自然本性を認識することの困難さは、トマスが人間本性あるいは人間靈魂に一種の無限性を帰しているところからも読みとれる。すなわち、人間靈魂の固有の能力・可能性たる知性と意志はいずれも或る意味で無限性への能力であるとされており

(2・6)、全き有、全き善を対象とする、といわれているのはその意味である(5・1その他)。さらに、人間は自らの自然本性的能力によっては到達しえないような(5・5)、被造的本性を超える善(5・6)としての至福への「自然本性的」欲望を有する、と言われるとき、後者の「自然本性的」は前者の「自然本性的」とは違った意味に解しなければならぬことは確かであろう。

至福への「自然本性的」欲望と言われる場合の「自然本性」の意味を理解するための手掛りは、1・7において「善く秩序づけられた欲求能力を有する者が究極目的として欲求するところの善が最も完全なものでなければならぬ」と言われているところに見出される。「欲求能力が善く秩序づけられている者」とは、善いハビトゥス、つまり(倫理)徳を有する者のことであり、「人間的善に関する判断は愚かなる者からではなく、賢い者からして得てくるのでなければならぬ」(2・1.ad 1)と言われる場合の賢い者である。ところで徳を有する者とは、その能力・可能性が真実の「力」となるところまでそれらを現実化・完成した者のことであり、その限りにおいて自然本性を完成した者のことである。

究極目的への欲望は自然本性によって規定されていると言われ、「自然本性はただ一つの方向をとる」(1・5)と言われるが、現実には幸福の追求は多様な方向をとっている。このことは、そこでの意志運動の直接的な原理は自然本性そのものではなくて、人間自身によって形成・獲得される本性としてのハビトゥスであると解することによって説明できるであろう。ハビトゥス形成においては人間自身が原因であり、その意味で人間は自己創造的であるといえるが、その過程においてより高次の原因としての自然本性がうかび上がってくるのである。すなわち、自然本性そのものは、多様で可変的なハビトゥス的本性の統一として、またその根拠として認識される。

このように見てくると、トマスの言う「自然本性」は、特定の対象への欲求について理解されているのではなく、そうした特殊の欲求を通して形成されるハビトゥス(そこでは意志に固有の原因性が作用している)が、まさしくそれへの秩序づけであり、状態づけであるような自然本性であることが明らかであろう。そしてこのような自然本性的欲求に対応するのが究極目的・至福であり、全き善であるが、それは現在の状態においては明確に認識されないままに欲求されているのである。

(5) したがって、トマスの言う自然本性的な傾向性による至福の欲求は、対象に規定されることによって行われる欲求という意味での「傾向性」による欲求ではない。むしろトマスにおける至福の欲求は、そこで直接に欲求されている対象は、善であるがゆえに欲求されているのではあるが、けっして善そのものではない——意志を規定するものではない——という否定的な認識によって導かれることによつてのみ、真の至福の欲求となりうるのである。こうしてトマスにおいては、善はあくまで自然本性的欲求によつて客観的に基礎づけられつつも、個々の具体的な善の欲求は対象によつて規定されるのではない。いいかえると、意志は或る対象をあくまで善であるがゆえに欲求するのであつて、意志が欲求するから善であるのではない、との原則が貫かれる。

このようにトマスは自然本性の意味を深めることによつて、倫理的価値を事実の領域へとひき下げることなしに、それを客観的に基礎づける可能性を示しているように思われる。そして、こうした自然本性のより深い意味の認識において、ハビトゥス論が重要な役割を果たしたことは明らかである。ハビトゥスを媒介とすることなしには、偶然的なる事実の世界から出発して必然的なる自然本性へ到達することは不可能だからである。